

マゾヒズムの誘惑

——ジャン・ラプラランシュと共に読むフロイト——

片岡 一竹

序 論

ジークムント・フロイトによるいわば〈誇張された〉性理論によって、私たちはもはやマゾヒズムを一部の「倒錯者」にとってのみ問題となる特殊なセクシュアリティの範疇に限定することができなくなった。性に関する他の諸々の概念同様、マゾヒズムは私たちの日々の生活の中に深く根を下ろしており、マゾヒズムとの関係抜きに私たちの生はないとまで言える。

一例を挙げるなら、私たちが多かれ少なかれ常に意識せざるを得ない道徳すら、フロイトによればマゾヒズムの問題系に属する。超自我の概念をめぐる彼の議論はまさしくそのことを明らかにしている。超自我とは一方で道徳的な〈法〉の機能であり、すなわち自我がそれを規範として「没道徳的な」(GW13:284) エスの欲動の蠢きを断念させる理想（自我理想）である。その意味で超自我は人間の内なる「高尚なもの」(GW13:264) に他ならないが、しかしこの「高尚なもの」は同時に、人間の心的装置において最も〈残忍なもの〉でもある。なぜなら超自我は他方で死の欲動の「運命」の一つであり、それは破壊欲動ないしはサディズムとして外界に投射されていた死の欲動の再内面化によって形成される、自己へのタナティックな攻撃性だからである。超自我の概念によってフロイトは、道徳性を司り、人間を〈善〉へと導くはずの「高尚なもの」が、同時に人間を死へと誘う悪魔的な衝動でもあるという逆説を明らかにした。そうしてこうした超自我のサディズムを迎え入れるものこそ、自我の「道徳的マゾヒズム」(GW13:373) に他ならない。「超自我のサディズムと自我のマゾヒズムとは互いを補い合い、合一して、同じ結果を生じさせる」(GW13:383)。したがって私たちが日常生活において道徳に従い、さらにそこになにがしかの満足をも見出すのであれば、私たちは不可避にある種のマゾヒズムの中を生きてしまう。このような「マゾヒズム的満足」と無縁で生きる人間は存在しないと言ってよいだろう¹⁾。

マゾヒズムにこのような重要な位置が与えられているにも拘わらず、フロイトの（サド）マゾヒズム論はその内部に様々な混乱、矛盾、逆説を孕んでおり、容易に理解することを許さない。本稿において私たちは、「欲動と欲動運命」（1915年）および「マゾヒズムの経済論的問題」（1924年）を中心にフロイトの（サド）マゾヒズム論を扱うが、しかし初めから整合的な見解を提示することは避け、まずはフロイトの記述を一つ一つ繙いていくことで、この混乱そのものを明るみに出すことを目指す。そして次に一つの可能な整理を示すが、その際に導きの糸となるのが、ジャン・ラプラランシュによるフロイト読解、とりわけ『精神分析における生と死』（1970年）および『精神分析の新たな基盤たち』（1987年）において展開された議論である。ジャン＝ベルナール・ボンタリスとの共著で発表された『精神分析用語辞典』（1967年）が頻繁に引用されるのに反して、ラプラランシュ個人の仕事は本邦において未だ十分に認知されているとは言い難い²⁾。この点で本稿はラプラランシュ理論の紹介としての価値も持ちうるだろう。

1. マゾヒズムあるいはセクシュアリティの誕生

フロイトがマゾヒズムおよびサディズムを初めて記述したのは1905年の『性理論のための三篇』においてであるが（GW5:56-59）、それは未だ現象の観察という性格が強く、欲動一般との関係においてサドマゾヒズムについてより踏み込んだ理論的考察が加えられたのは、1915年のいわゆる「メタ心理学論」の最初の論文「欲動と欲動運命」においてである（GW10:219-222）。しかしこの論文を読む者は皆、その論旨の非一貫性、議論に絶えず加えられていく諸々の訂正に眩目されざるを得ないだろう。以下私たちはこの論文において展開されるサドマゾヒズムの記述をほぼ一段落ずつ読解していくが、そのような詳細な作業が必要になるほど、テキストは紛糾を極めているのである。

1-1. 「欲動と欲動運命」における錯綜

「欲動と欲動運命」は、欲動概念の再定義が行われる前半部（GW10:210-219）と、欲動がいかなる運命を辿るかを論じた後半部（GW10:219 *sq.*）とに区分できる。この論文においてフロイトは（1）「対立物への反転」と（2）「我が身への向き直り」という二つの欲動運命を論じているが、前者の欲動運命はさらに（1-1）「能動性から受動性への向き直り」と（1-2）「内容の反転」に分けられる。このう

ち (1-1) と (2) はしばしば混合して現れるとされ、その例としてサドマゾヒズム、および窃視／露出（見ることの快／見せる快）の対が論じられる。

サドマゾヒズムはフィッシャー社版『全集』第十卷二二〇頁の第四段落以降本格的に論じられていく。この時期のフロイトのサドマゾヒズム論の特徴は、能動的なサディズムを出発点とし、マゾヒズムは「自我自身に向き直ったサディズム」（GW10:220）として捉え、それをあくまで二次的、派生的なものの地位に置いていることである。したがってサディズムからマゾヒズムへ至る欲動運命は次に示すような行程を辿り、その中で主体＝主語（Sで示す）と対象＝目的語（Oで示す）の各々が以下のように変換されていく——初めに（a）能動的に自分が他人を苛めるサディズムが存在する。次に（b）欲動が我が身に向き直ることで対象が〈他者〉から〈私〉に交換され、自分が自分を苛めるという状態に至る。ただしこれはまだマゾヒズムとは言えない。というのもここではマゾヒズムの必要条件である〈他者に対する受動性〉が成立していないからである。「加虐嗜好から生じるのは自虐、自己処罰であって、マゾヒズムではない」（GW10:221）。この段階の臨床像となるのは、強迫神経症者にみられるサディスティックな欲動の振る舞いである。サディズムが能動的であるとすれば、この段階は中動的と形容できる³⁾。そして最後に（c）苛める主体（行為者）の役割を他人に引き受けさせ、主語が〈私〉から〈他者〉へ変換されることによって、初めて受動的な形式のマゾヒズムが成立する。このように欲動は、（a）能動的サディズム（S：私、O：他者）→（b）中動的強迫神経症（S：私、O：私）→（c）受動的マゾヒズム（S：他者、O：私）という行程を辿る。

二二〇頁の第四段落から二二一頁の第一段落に至る間に完成したこの（a）→（b）→（c）の経路は、しかしながら二二一頁の第二段落において早くも崩される。そこでのフロイトの記述によれば、痛みを与えることを目的とする狭義のサディズムは、痛みという不快感覚が性興奮に飛び火して快に満ちた状態になるという（b）段階におけるマゾヒズムの転回が成し遂げられることを俟って初めて成立するものである。そこで自分は、他人に痛みを加えながら、苦しんでいる対象と同一化することによってマゾヒスティックに痛みを享受する。すなわちフロイトは初め、サディズムを起点に据え、マゾヒズムをそこから派生する二次的なものとして据えたが、その僅か一段落後には、正反対に、マゾヒズム的な満足を経験し、サディズムがそこから発生すると語っているのである。ここには明らかに矛盾が生じている。そこでフロイトの行論に整合的な解釈を加えようと望むのであれば、フロイトが語っていないサドマゾヒズムの第四段階（d）を設け、

サディズムを二つに区分する他ない。すなわち (a) 段階における一次サディズムと、(d) 段階における二次サディズム（行為としてはサディズム的だが満足はマゾヒズム的なもの）とにサディズムを分割する必要がある。(b) 強迫神経症の段階からは、(c) マゾヒズムと (d) 二次サディズムの二つがそれぞれ派生するものと考えられる。

そして二二二頁の第二段落において窃視／露出の対を説明する段に至ると、議論はさらに紛糾を極める。初めにフロイトは、サドマゾヒズムの場合と同じく、(a) 能動的な窃視から (b) 中動的な〈自分の身体を視ること〉を経て (c) 受動的な露出へ至る行程を描くが、その後同じ段落内でフロイトは、窃視／露出はサドマゾヒズムには見られない (a) 以前の段階を有していると述べ、新たな行程を描く。そこで出発点とされるのは、(α)「自分で性器を視る＝性器が自分に視られている」という「自体性愛的」(GW10:222) な段階である。それは自分で自分を対象とする段階とすることができる (S: 私、O: 私)。ここで主体の〈私〉と対象の〈私〉のどちらが変更されるかに応じて、二つの運命が分岐する。対象の方が変更される場合、(α) の左辺から (β)「自分が余所の対象を視ている」という能動的な視ることの快 (S: 私、O: 他者) が生じ、主体の方が変更される場合、(α) の右辺から (γ)「自分の対象が余所の人によって視られている」という見せる快ないし露出 (S: 他者、O: 私) が生じるとされる。つまりここでは自体性愛（中動）から能動と受動とがそれぞれ発するというモデルが提示されているのである。

以上のように、「欲動と欲動運命」におけるフロイトの記述は、欲動運命を説明する際に、出発点が能動的なものに置かれるか中動的なものに置かれるかが一定せず、絶えず揺れ続けている。そのため (1)「能動→中動→受動」という行程 ((a)→(b)→(c) の行程) と (2)「中動→能動／受動」という行程 ((α)→(β)／(γ) の行程) の二つが解離的に用いられることとなり、サドマゾヒズムに関しては能動性を起点とする (1) の行程が、「窃視／露出」に関しては二通りの行程が、それぞれ適用されている。さらに後の箇所で「愛する／愛される」という対が論じられる際には、(2) の行程のみが適用されることとなる (GW10:226)⁴⁾。さらに前述した通り、サドマゾヒズムの説明においてサディズムの位置づけが一定しておらず、マゾヒズムの前段階となる一次サディズム ((a) 段階でのサディズム) とマゾヒズム (的満足) から派生する二次サディズム ((d) 段階でのサディズム) という二つのサディズム概念が暗に区別されていると考えられるが、フロイトは両者の明確な区別を提示していない。

こうした議論の揺らぎには、1910年代において導入された「ナルシズム」概念が精神分析の理論体系にもたらした打撃の痕跡が刻まれている。「精神分析的観点から見た心因性視覚障害」(1910年)において定式化されて以来、「セクシュアリティないし性的快の獲得に仕える欲動と、個体の自己保存を目的とするもう一方の自我欲動との間の否定しえない対立」(GW8:97-98)はフロイトの欲動論の基礎をなしていた。しかしながら「ナルシズムの導入にむけて」(1913年)において、両方の欲動のエネルギーは原初的なナルシズムの状態では一緒になっており、対象備給が成立する段階に至って初めて両者の区別が可能となると論じられるようになると(GW10:141)、もはや自我欲動と性欲動との対立は必ずしも「否定しえない」ものとは言えなくなる。両者の対立は二次的なものと見なされ、より早期の段階としてナルシズムないし自体性愛の状態⁵⁾が発見されたからである。

ナルシズム論を承けて発表された「欲動と欲動運命」においても、欲動の変遷(欲動運命)を語る際、フロイトは自我欲動と性欲動との対立以前のナルシズム(自体性愛)の状態に出発点を置こうと試みる。実際に窃視／露出、および愛する／愛されるなど、多くの対立物への反転がナルシズムを出発点として説明されている。しかしサドマゾヒズムのみ、それとは異なる、能動的な対象備給(一次サディズム)を出発点とするモデルが採用されている。それはフロイトが、サドマゾヒズムに関して、対象備給に先立つ自体性愛の段階を認めていないためである。そしてこの否認は、サディズムから発生するのではない「直接のマゾヒズム的満足」(GW10:220)に関する否認と並行している。サドマゾヒズムにおいては初めに対象ありきであり、対象なしに内界において完結した、いわば自体性愛的な自己への攻撃を、フロイトは決して認めようとしないのである。

1-2. 「マゾヒズムの経済論的問題」における転向

しかし九年の時を経て「マゾヒズムの経済論的問題」が執筆されたとき、フロイトはそれまでの見解を訂正し、一旦は否認した直接的な自己への攻撃を認めるに至る。それは二つの論文を隔てる時間の中で欲動理論自体に大きな地殻変動が生じたからである。『快原理の彼岸』(1920年)における死の欲動概念の導入は、従来の自己保存欲動(自我欲動)と性欲動の二元論を抜本的に更新し、新たに生の欲動(エロス)と死の欲動の二元論を拮定した。この死の欲動の概念に導かれて、フロイトは原初的な自己への攻撃を認めざるをえなくなったのである。

こうした〈転向〉を踏まえて、サドマゾヒズムは新たにエロスと死の欲動との「混合〔Mischung〕」および「分離〔脱混合（Entmischung）〕」（GW13:269-270）とに基づいて語られるようになる。エロスのエネルギーであるリビドーは、生命体を死へと導く危険な死の欲動を飼いならすという責務を負わされている（GW13:376）。この責務を果たすためにリビドーは（Ⅰ）死の欲動を拘束し、また（Ⅱ）それを外界の対象に向かわせる。ここで（Ⅰ）の作業によって成立する、リビドー的に拘束された＝性愛化された死の欲動が「一次マゾヒズム」と呼ばれ、次いで（Ⅱ）の作業によってリビドー的に外在化された死の欲動が「サディズム」と呼ばれる。さらに（Ⅲ）外在化された死の欲動ないしサディズムは、「ある種の状況下において」（GW13:377）再び取り込まれることがあり、それは「二次マゾヒズム」として（Ⅰ）の一次マゾヒズムに加算される。

ここでフロイトにより記述された（Ⅰ）一次マゾヒズム→（Ⅱ）サディズム→（Ⅲ）二次マゾヒズムという行程は、「欲動と欲動運命」においてサドマゾヒズムの説明に用いられていた（a）能動的サディズム→（b）中動的強迫神経症→（c）受動的マゾヒズムの行程よりも、むしろ窺視／露出を説明する（ α ）→（ β ）／（ γ ）の行程に近い。ただし窺視／露出の場合は（ α ）自体性愛的段階から（ β ）能動的段階と（ γ ）受動的段階が同時に生じていたが、「経済論的問題」におけるサドマゾヒズムはむしろ、（ α -Ⅰ）（中動的な）内界における一次マゾヒズム→（ β -Ⅱ）外界に投射されたサディズム→（ γ -Ⅲ）サディズムの取り込みによって内界に帰した二次マゾヒズム、という三段階を経巡るものである。

1-3. 「依託」概念を主軸としたラプランシュによる欲動論

以上のようにサドマゾヒズムに関するフロイトの記述を総覧したところで、議論が整理されるところか、むしろますます混乱が深まることがわかる。しかしここでラプランシュによる議論を参照することで、こうした混沌の中に一つの秩序がもたらされることだろう。

「欲動と欲動運命」における混乱の原因は、出発点を対象備給に置く場合（サドマゾヒズム）と、出発点を自体性愛ないしナルシズムに置く場合（窺視／露出）が混在していることにあった。ここに見出されるのは、欲動が対象と共に始まるか、それとも対象なしに始まるかという問題である。しかしラプランシュによれば、それは偽の問題に過ぎない。なぜだろうか。彼の主張の背景にあるのは、「依託（Anlehnung/étayage）」をめぐる問題系である。依託とはまさに「ナルシズムの導入にむけて」において導入された用語であり、「最初期の自体性愛的

性的満足は、生命にとって重要な、自己保存に仕える諸機能に接続した形で体験される。性欲動は初めのうち自我欲動の満足に自らを依託しており、後になって初めて自我欲動から独立する」(GW10:153)とフロイトは主張する。依託は性欲動の起源を明らかにする概念である。性欲動は自我欲動といういわば〈母体〉をもち、この母体から分離されることによって、固有の意味での（自我欲動と区別される限りでの）性欲動が誕生するに至る。「したがって自体性愛は最初の時ではない」(VM:35/43)⁶⁾とラプランシュは指摘する。むしろ自体性愛は第二の時であって、すなわちそれは、自己保存の本能⁷⁾に依託していた性欲動が分離され、最初の時において存在していた本能の機能的対象が失われる契機である。「一方で対象は初めから存在しているものの、他方でセクシュアリティは初めのうち現実的对象を有していない」(VM:35/44)。自体性愛を最初の時に位置付けてしまうと、自体性愛が対象愛の時に発展する際に、それまで不在であった対象がどこから出現するかが定かでなくなる。しかし実際には対象は初めから存在しており、それはただ「自体性愛的な逆転」(Ibid.)によって性欲動の分離が生じる際に喪失されるに過ぎない。したがって対象愛の段階において発見される対象は、『性理論三篇』においてフロイト自身が指摘した通り (GW5:123)、再発見された対象である。ただし自体性愛の時における喪失によって、最初の対象と再発見される対象との間にはずれが生じている。すなわち再発見される対象は性欲動の対象として幻想の中で性愛化されており、もはや自己保存にとつての現実的な機能的対象という身分にはないのである。

この依託の理論に基づいて、上述の欲動理論の混乱は以下のように解決される——機能的対象との本能的な関係が性欲動の分離によって自体性愛的に向き直す契機こそが固有の意味でのセクシュアリティの誕生の時であると考えれば、「欲動と欲動運命」において記述されたサドマゾヒズムが出発点とする (a) 能動的な一次サディズムは、実はサディズムではない。それは「外部に向けられているが非性的な攻撃性」(VM:140/173)である。すなわち一次サディズムとはセクシュアリティの成立以前の、自己の身を守ることに資する攻撃性であり、固有の意味でサディズムの名に値する性愛的なものは、私たちが第二サディズムと名付けた (d) 段階のものに限られるのである。したがって性愛的なものとしてのサドマゾヒズムの出発点は、中動的な (b) 段階にこそ求められる。ラプランシュはこの段階を、(c) 段階の「受動的マゾヒズム」(VM:142/177) と対比して「再帰的マゾヒズム」(Ibid.) と呼んでいる。それは、マゾヒズム的な満足の可能性それ自体を成立させる契機であり、そこから行為の主体と対象との組み

合わせに応じて（二次）サディズム、（受動的）マゾヒズムがそれぞれ派生する出発点である。そうであれば、セクシュアリティは初めにマゾヒズムという形式の下で成立すると言わなければならない（VM:139/171）。

こうしたラプラシユの議論の正当性を検証するために「欲動と欲動運命」のテキストを再び参照してみると、なるほどそこでフロイトは（a）一次サディズムを形容する言葉をほとんど持っておらず、特にその満足がどのようなものかについて言及していない。満足を伴ったものとして記述されているサディズムは（d）二次サディズムのみである。しかるにこのサディズムは、行為としてはサディズム的だが、それが自らの満足として有しているのは、自分が攻撃している対象への同一化によって生み出されるマゾヒズム的な満足であった。したがってサディズム／マゾヒズムの区別はただ行為の形式のみに関わるものであって、その満足はいずれにしてもマゾヒズム的であると、私たちはラプラシユと共に主張することができる。

サドマゾヒズムの出発点を再帰的－自体性愛的な（b）段階におくことによって、このテキストの中にみられた二つの行程（「（a）能動→（b）中動→（c）受動／（d）能動」と「（α）中動→（β）能動／（γ）受動」）の間の矛盾は解決される。先述の通り、フロイトは自体性愛的な（α）段階を能動的な（a）段階より以前の段階として語っているが（GW10:223）、ラプラシユは——明言はしていないものの——フロイトが設定した諸段階の序列に修正を加え、（b）段階と（α）段階とを同一視し、（a）段階に関してはセクシュアリティの外に放逐することで処理している。これによって、サドマゾヒズムにせよ窃視／露出にせよ、いずれも出発点となるのは再帰的（中動的）な自体性愛の段階（b=α 段階）であって、両者の行程の間に不整合は存在しないと言うことができる。

さらに「マゾヒズムの経済論的問題」におけるエロスと死の欲動との混合／脱混合のモデルもまたこの図式で捉えることが可能である。そこでも出発点に据えられるのは再帰的（中動的）と形容できる（Ⅰ）一次マゾヒズムであって、そこから（Ⅱ）サディズム、（Ⅲ）二次マゾヒズムがそれぞれ派生してくると考えられる。死の欲動においても再帰的な「自己」の 때가優位となっており（VM171:212）、「欲動と欲動運命」と「マゾヒズムの経済論的問題」は、死の欲動の導入という1920年の〈転向〉を経ているにも拘わらず、おそらくフロイト自身気づいていない「非常に優れた一致」（VM:137/170）を示している、とラプラシユは主張する⁸⁾。

『精神分析における生と死』において提示された図を私たちに改変して、

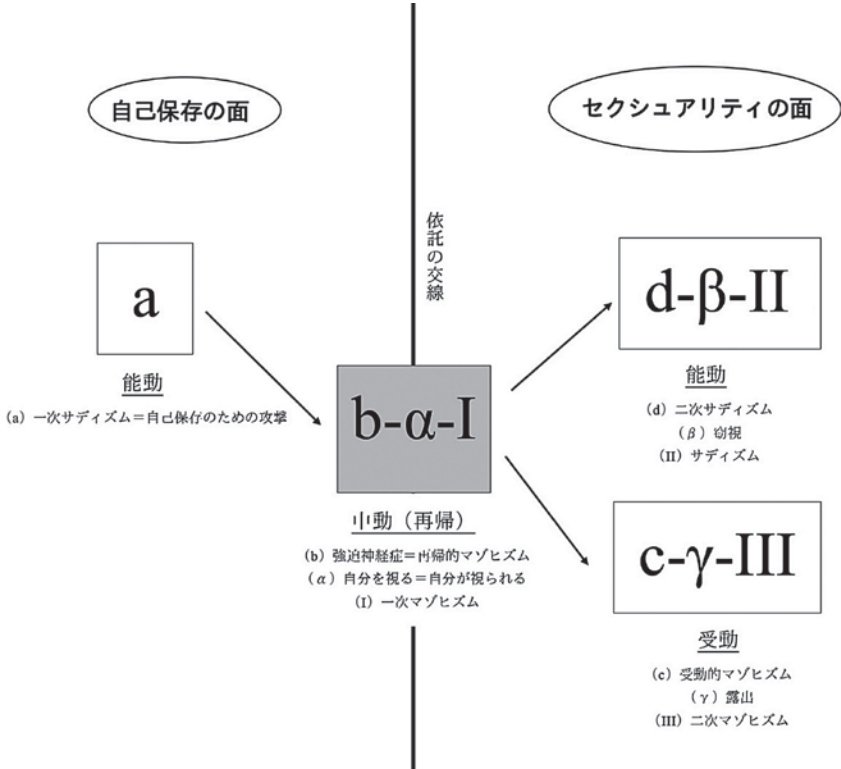


図1 VM:146/181 を元に作成

これまでの議論を上記のように図示することができる⁹⁾。

図中に提示された諸要素の中で核となるのは、「自己保存の面」と「セクシュアリティの面」とを分割する「依託の交線」である。個体においてセクシュアリティが誕生するのは、この交線が表す〈依託からの分離〉の契機においてであり、そこで再帰的形式の下に可能になるマゾヒズム的満足こそ、セクシュアリティの最も原初的な姿に他ならない。

それでは、セクシュアリティの誕生の契機となるこの〈依託からの分離〉とは何の謂いか。それを明らかにするためにはラプラシユのより後期の著作、『精神分析の新たなる基盤たち』を参照する必要があるだろう。

2. 依託における誘惑

2-1. 欲動と対象関係

依託という概念は、ラプラシユが（ポンタリスと共に）強調するまで、フロイトにおいてほとんど顧みられることがなく、また長い間誤解に晒されてきた。「ナルシズムの導入にむけて」においてフロイトが初めてこの用語を導入したのは、対象選択の型を「依託型」と「ナルシス型」に分類するためであった。依託型の対象選択とは「子供の哺育や世話や保護にあたる人物〔……〕つまり母やその代わりとなる人物」（GW10:153-154）を性対象の原型とする対象選択である。そのため依託という概念は子供がその生物学的な「寄る辺なさ」ゆえに保護者としての〈母〉に寄り掛かること（anlehnen）として性急に理解されてしまった。しかし、『精神分析における生と死』においてラプラシユも強調する通り、依託とはあくまで自己保存欲動と性欲動という二つの欲動——よりラプラシユ流の言い方をすれば、本能と（性）欲動——間の関係の謂いであり、「〔依託という〕この観念は元来、主体が対象に支えられること（子が母に支えられること）を指すものでは全くない」（VM:31/38）。したがって、未だに散見される¹⁰⁾ こうした誤解に基づいて、依託という欲動の境域に属する概念と、親子関係のような対象関係（他者関係）の範疇にある概念とを直接的に結びつけることは避けなければならない。

しかし同時に、両者の問題系はある媒介項を経由して非常に重要な関係を有している。その媒介項とは何か。それを示唆するのが、『精神分析の新たなる基盤たち』においてラプラシユが指摘している、「1897年における誘惑理論の放棄によって残された空白の中から依託理論が生じてきたという事実」（NF:142）である。周知のようにフロイトはそのキャリアの初めにおいて、神経症の病因が幼年期に周囲の大人から——とりわけ〈父〉から——受けた誘惑（性的虐待）によって生じた外傷にあるという性的病因説ないし「誘惑理論」を自身の理論の核に据えていた。しかし1897年9月21日のフリース宛書簡において誘惑理論の破棄が宣言された後、フロイトは、幼年期の虐待体験が実際に生じたことであれ捏造であれ、心的現実においてそれが担う重要性に変わりはないという主張に基づき、「^{ファンタジー}空想」という側面からこの心的現実の成り立ちを論じる方向へと議論を転向させることとなる¹¹⁾。ラプラシユがここで提示しているのは、初めに誘惑理論によって想定されていたセクシュアリティの起源が、誘惑理論の放

棄以後、依託の概念に引き継がれたという主張である。しかし彼は同時に、誘惑こそが前述した〈依託からの分離〉を可能にするファクターであるとも主張する。自己保存欲動（本能）を一つの玉葱のように捉え、そこから玉葱の表皮が剥けるようにして性欲動が発生してくるというイメージを提示しながら、「自己保存の玉葱の皮を剥くのはまさに誘惑であって、自己保存がなながしか未知の内発的運動によって劈開するわけではない」（NF:143）と彼は言う。しかし依託の概念が導入された時点で、すでに誘惑理論は放棄されていたはずではなかったのか。

2-2. ラプランシュの一般誘惑理論

こうしたラプランシュの議論を理解するためには、『精神分析の新たな基盤たち』全体の核となっている彼の「一般誘惑理論（*théorie de la séduction généralisée*）」を参照する必要がある。たとえフロイトが誘惑に関する議論を早々に放棄しているとしても、実はこの概念は、フロイトのテキスト全体を貫いて、それどころか精神分析なるものそれ自体の基盤という地位において、存在し続けている。そう主張することでラプランシュは、『精神分析における生と死』において依託の概念の下で考察したセクシュアリティの起源の問題に別の角度から光を当てている。

一般誘惑理論は（1）「幼児誘惑（*séduction infantile*）」、（2）「早期誘惑（*séduction précoce*）」、（3）「原誘惑（*séduction originaire*）」という三つの誘惑概念から構成されている（NF:104の表を参照のこと）。それぞれの誘惑概念を簡単に明らかにしていこう。

（1）幼児誘惑は、一般に「フロイトの誘惑理論」として知られるものを指している。そしてラプランシュは、1897年9月21日に放棄されたこの幼児誘惑に関する理論を、自身の「一般誘惑理論」との対比において、「限定誘惑理論（*théorie de la séduction restreinte*）」と称している（NF:106 sq.）。幼児誘惑とは、精神分析の作業によって再発見、再構築、想起される時期尚早の性的体験の謂いであり、限定誘惑理論は、主体がまだセクシュアリティを知る以前に倒錯的な大人から受けた性的虐待体験——主要なものは〈父〉による虐待である——の事実に基づく形で構想されている。

（2）早期誘惑とは、誘惑理論が放棄された後の誘惑概念の謂いである¹²⁾。ラプランシュによれば、誘惑理論は放棄されたと言うよりも、抑圧されたと言う方が適切である。1897年9月21日から1964-1967年（ラプランシュが仕事を行っ

た現代の時期)までの期間を、彼は「抑圧の時期」(NF:116)と名付けている。1897年9月21日以後、誘惑理論は心的現実ないし空想に関する問題系に取って代わられるが、しかしその後もフロイトは誘惑の概念をそれまでとは別の形で保持していた。それは〈母〉の世話によって生じる早期誘惑という形である。ここでは「幼児誘惑の主要な登場人物であった倒錯的な〈父〉が、本質的に前エディプス的な関係において、〈母〉に道を譲っている」(NF:119)。フロイトは『続・精神分析入門講義』などにおいてこうした〈母〉からの誘惑の空想について語っている(GW15:128-129)。幼児誘惑が性的襲撃という不幸な出来事の偶然性に依拠していたのに対し、ここで語られている〈母〉からの早期誘惑は、人間が寄る辺ない幼児期に保護者の世話を必要とする以上不可避のものであり、必然性に基いている。しかしこの早期誘惑はあくまで「抑圧の時期」に位置する。フロイトは一方でこうした早期誘惑を発見していながら、他方で「早期誘惑を理論全体の中に位置付け直すことが欠けている」(NF:120)。この新たな誘惑概念は、しかしながらフロイトをして新たな誘惑理論を再構想させるまでには至らなかったのである。また概念そのものに関しても、フロイトは〈母〉による世話の行動が呼び覚ます性的感覚を性器的なものに限定してしまっている。しかし実際には世話による性感の呼び覚ましは、あらゆる身体性の源域、とりわけ肛門や口唇の水準においても見られるとラプランシュは指摘する。

〈母〉による早期誘惑の概念のもとでラプランシュが構想するものは、依託における誘惑と言い換えられることができるだろう。誘惑者としての〈母〉から身体的世話を受ける時期は、欲動の水準においては、性欲動の依託の時期でもある。そして〈母〉の世話が性的感覚を呼び覚ますとき、自己保存本能(欲動)に自らを依託していた性欲動が本能から切り離され、固有の意味でのセクシュアリティが誕生する。自己保存の玉葱の皮を剥く行為者は、まさに世話人としての〈母〉である。そうであれば、私たちが探求していた欲動と対象関係の両領域の媒介項、それは〈母〉の世話による早期誘惑に他ならないと結論できる。ここにおいて早期誘惑の概念は、自己保存とセクシュアリティとの橋渡し役を担うことで、本能的な他者関係と欲動との間を媒介しているのである。

(3) しかしラプランシュの議論はこれに止まらない。ここまで述べられた幼児誘惑と早期誘惑は、原誘惑の概念を俟って初めてその基盤へともたらされる(NF:127)。それでは原誘惑とは何の謂いか。この用語を基にラプランシュはフロイトが語った「原光景(Urszene/scène originaire)」——幼児が両親の性交を目撃すること——を再解釈する。『夢解釈』においてフロイトは、両親の性交の

目撃によって子供の中に「自身の理解が及ばない性的興奮」(GW2/3:591)が惹起され、この興奮が拒絶され不安に転化する様を記述しているが、ラブランシュはこの記述を原誘惑に関する最初のテキストとして捉える。「[原光景]と言われる光景は、それ自体子供にとって誘惑である——原誘惑という意味で。両親の性交の目撃によって、子供は外傷的で同化不能な諸々のイメージ、諸々のシナリオの断片を提示され、また押し付けられる」(NF:126)。

重要なのは、こうした原光景において大人たちが子供に対し「謎のシニフィアン」[*signifiants énigmatiques*](NF:125)を提起するということである。ここで原誘惑の名に値するのは、セクシュアリティの〈謎〉の伝搬それ自体である。「[母の]乳房にせよ[父の]暴行にせよ、それらが誘惑者であるのは、ただそれらが透明ではなく、不明瞭なものであり、〈謎のもの〉を伝搬するからに他ならない」(NF:127)。これまで語られた早期誘惑や幼児誘惑という形の誘惑は、〈謎〉の伝搬によってこそ基礎づけられる。子供が初めてセクシュアリティに直面するとき、それはまずもって〈謎〉という形で出現する。セクシュアリティは子供の理解の範疇を越えたものとして現れ、それを前にして子供は不安に陥りながらも、何とかして眼前の〈謎〉を解こうと奮闘する。フロイトが折に触れて語った「幼児の性理論」¹³⁾とはまさしく〈謎〉の解明のための子供の試みの所産である。

前述した世話と依託の場面においても〈謎〉は現れる。大人が子供の世話をやり欲求ないし自己保存本能を満足させるとき、同時に大人から子供に向けて欲求の満足とは別のメッセージ、すなわち性的メッセージが潜在的に送られている。「これらの謎のメッセージによって、困難であり、さらには不可能な、制圧〔支配 (*maîtrise*)〕および象徴化の作業が掻き立てられ、この作業は必然的にその背後に諸々の無意識的な残余を遺す」(NF:128)。依託における誘惑は、欲求の満足と結びつきながらも、しかし欲求の範疇を越えた〈謎〉を伝搬することとして理解される。例えば泌乳の自然な対象である乳房は同時に性的備給の対象ともなるが、そこで子供は「私に哺乳することを越えて彼は何を望んでいるのか、つまるところ、なぜ彼は私に哺乳することを望むのか」(NF:125)という〈謎〉を問わずにはいられない。ここでの〈謎〉は哺育という範疇の彼岸に位置する欲望への問いであり、まさにそれが子供を自己保存の境域からセクシュアリティの境域へと誘う——すなわち、誘惑するのである¹⁴⁾。

2-3. マゾヒズムの誘惑

ラブランシュの議論において、依託における原誘惑は、欲求の満足を越えた

セクシュアリティの〈謎〉を伝搬することとして理解される。しかるに『精神分析における生と死』において、依託からの分離によって誕生するセクシュアリティはまずもって（再帰的）マゾヒズムという形式をとると論じられていた。これらの議論を総合して、私たちは以下のように結論することができる——主体は、原誘惑によって示される〈謎〉のシニフィアンを、マゾヒズム的な仕方で享受する。セクシュアリティの侵入が常に外傷的であるのは、それが一方で子供を圧倒し、大人の能動性に対して全く無力な受動的状態に置く（NF:125）強制力であると同時に、他方で子供をして我が身に降りかかったこの外傷の〈謎〉を解くよう強要する拘束力でもあるからである。そして子供がこの威力に圧倒された時、そこから逃げ出すことを望むのみならず、〈謎〉の解明に乗り出さんとするのであれば、そこで唯一の支えとなるのはマゾヒズムの力に他ならない。子供はマゾヒズムの助力を借りることで初めて外傷的な苦しみを迎え入れ、さらには〈謎〉の解明に向かうことで外傷的なセクシュアリティを我がものとするよう動機づけられる。なぜならマゾヒズムこそ、辛い〈痛み〉を享樂に変換することを可能にする、たった一つの洗練された手法だからである。

ラブランシュはこの誘惑としての〈謎〉を、テーバイの門前において——父を殺し、母を娶るあの「エディプス的」ドラマに参入する以前の——オイディプスを待ち構えるスフィンクスに喩えている（NF:126）。スフィンクスの〈謎〉に答えられないことは、この怪物に食い殺されることに直結する。この危険で致死的な問答に臨むオイディプスの悲壮な勇敢さの中で約束された享樂を、いかなる言葉によって形容できるだろうか——「マゾヒズム」を除いて。

結 論

本稿はマゾヒズムをめぐるフロイトの議論の混乱を明らかにすることから始まった。「欲動と欲動運命」において、サドマゾヒズムの発展は（a）能動的（一次）サディズム → （b）中動的強迫神経症 → （c）受動的マゾヒズムという行程を辿るとされているが、この議論は極めて錯綜しており、様々な矛盾が生じている。フロイトがサディズムの語を用いるとき、そこでは（a）段階における一次サディズムと（d）段階における二次サディズム——それは（b）段階におけるマゾヒズム的満足の成立を俟って初めて可能となる——とがごっちゃ混ぜにされており、また窃視／露出においてはサドマゾヒズムの発展の図式に加えて、（α）中動的、

自体性愛的段階を起点とする（ β ）能動的段階および（ γ ）受動的段階の発展という大きく異なった図式が用いられている。さらに「マゾヒズムの経済論的問題」においては、欲動理論の刷新によって（Ⅰ- α ）一次マゾヒズム→（Ⅱ- β ）サディズム→（Ⅲ- γ ）二次マゾヒズムというまた別のモデルが採用されることとなる。これらの混沌を整序するために、私たちは『精神分析における生と死』におけるラプラランシュの議論を参照し、本能に対する（性）欲動の依託の理論に基づき、（b- α -Ⅰ）段階を「再帰的マゾヒズム」としてセクシュアリティの起点に据えることで、諸々の矛盾を解決する途を拓いた。そのことによってセクシュアリティの起源がマゾヒズム的なものにあることが明らかとなった。

次に私たちは依託理論に関する理解を前進させるために、ラプラランシュの「一般誘惑理論」を検討した。セクシュアリティの起源となる〈依託からの分離〉のファクターは誘惑の中にこそ存する。フロイトの「限定誘惑理論」が幼児期の性的虐待という経験の偶然性に依拠しているのに対し、ラプラランシュの誘惑理論は子供と大人との間の差異、子供が大人による世話を必要とするという必然的な条件に基づくより一般的なものである。諸々の誘惑概念はセクシュアリティの〈謎〉の伝搬そのものを意味する原誘惑によって基礎づけられる。以上の議論を総合して私たちは、子供はセクシュアリティの〈謎〉の侵入という外傷的体験をマゾヒズム的形式の下で生き延びるという結論に達した。

本稿で参照したラプラランシュの整理は非常に明晰であるが、しかしながら（a）段階の一次サディズムを自己保存のための攻撃性と同一視することができるかについては疑念が残る。マゾヒズム的な満足に依拠しない混じり気なしのサディズム的満足というものを想定するのは全く不合理なことであろうか。私たちが検討した「欲動と欲動運命」二二二頁の第二段落における一文には、痛みを加えることを目標とするサディズム（（d）段階の二次サディズム）とは区別される、子供のサディスティックな振る舞いに対するフロイトの言及を見出すことができる。「サディスティックな子供は痛みを加えることを考慮に入れているわけではなく、それを目論んでいるわけではない」（GW10:221）。実際、子供が昆虫や小動物などを相手にして、大人の目から見れば残酷極まりない遊戯に耽るさまはしばしば観察される。子供がトンボの翅をむしったり、蟻を踏みつぶしたりして愉悦する時、子供が自身のサディズム的行為によって虐げられる標的の苦しみと同一化して満足を得ているとは考えにくい。むしろ子供にとってそうした行為は、目の前に積まれたブロックの山を崩すのと同程度の価値しか持っておらず、それゆえにこそあのような残酷な行為を前にして一切の躊躇を見せないの

ではないか。子供のこうした遊戯が自己保存の境域に属すると考えるのは明らかに不合理である。こうした日常的な風景は、(a) 段階のサディズムが、自己保存の領域にある攻撃性としてのみならず、一切のマゾヒズムを前提としないいわば純粋サディズムとしても把握されうることを示唆している。この純粋サディズムは、サドがその犯罪を経由して辿り着こうとしていた第一の自然の〈理念〉と近いとも考えられる。この問題に関しては稿を改めて論じる必要があるだろう。

[付記]

本論文は、令和二年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

注

- 1) さらに道徳的マゾヒズムは精神分析の臨床においても大きな問題となる。『自我とエス』において、超自我に由来する無意識的罪責感が治療の進行を妨げる陰性治療反応として機能することが明らかになって以来（GW13:278-279）、フロイトはその後のテキストで繰り返しこの主題に立ち戻っている。翌1924年の「マゾヒズムの経済論的問題」において、無意識的罪責感は「最も重大な抵抗の一つ」（GW13:378）とまで形容される。さらに、抵抗ないし陰性治療反応に関する議論の集大成とも言える1937年の「終わりある分析と終わりのなき分析」においてフロイトは、去勢コンプレクスという究極的な抵抗、「頑として揺るがない岩盤」（GW16:99）に辿り着く途上で、かなり根深い根拠に根差したものとして罪責感に基づく抵抗を位置づけている（GW16:88）。このように超自我ないしそれに基づく無意識的罪責感は精神分析の臨床にとって非常に強力な障壁となりうる。それは、『自我とエス』において主張されている通り、罪責感が「病気であることに充足を見出し、病苦という罪を決して手放そうとしない」（GW13:279）からである。ここで罪責感が可能にするとされている充足ないし満足こそ、道徳的マゾヒズムの名を冠されるものに他ならない。患者にとって道徳的マゾヒズムの満足は、分析によって眼前に示された将来の「幸福」を払いのけてまで、現在の不幸に甘んずるに値するものなのである。紙幅の都合上、本稿において道徳的マゾヒズム固有の問題を論じることではできないが、しかし本稿は道徳ないし超自我の「満足」に関する来るべき議論のための前倣いを作ることを目的としている。
- 2) ただし『精神分析における生と死』の訳者の一人でもある十川幸司の『フロイディアン・ステップ』は、特にその第五章においてラブランシュの議論を大々的に参照しており、ラブランシュ理論の解説としても読みうる（十川 [2019:147-167]）。本稿もまた十川のこの仕事に大きな影響を受けた。
- 3) フロイトはこの段階を「中動的」と形容しているが、より精確には「再帰的」と言う

べきだろう。ラブランシュが指摘している通り (VM:143-144 n/177)、フロイトの言う「中動態」は行為の主体と対象とが癒着している状態 (例えば Je me suis cogné à la table (私はテーブルにぶつかった) と表現される状態) ではなく、主体と対象とが同じものを指しながらも区別されている状態 (Je me suis cogné la tête contre le mur (私は壁に頭をぶつけた) という状態) を指しているからである。

- 4) つまり (α)「自分が自分を愛する=自分が自分から愛される」(S: 私、O: 私) というナルシズム的愛から、(β)「自分が他人を愛する」(S: 私、O: 他者) および (γ)「自分が他人から愛される」(S: 他者、O: 私) がそれぞれ生じてくる。
- 5) 「ナルシズムの導入にむけて」において自体性愛とナルシズムは明確に区別されており、自体性愛をもたらず欲動が初めから存在しているのに対してナルシズムは自我という統一体の形成を俟って初めて成立すると論じられている (GW10:142)。しかし「欲動と欲動運命」を含めたいくつかの著作においてフロイトはしばしばこの区別を無視しており、二つの概念を同義語として扱っている (GW10:224)。
- 6) 私たちが参照したのは PUF から刊行されたポケット版の第二版であるが、ここに頁数を挙げた邦訳は Flammarion 社から刊行された初版を底本としている。ただし私たちが引用した範囲でテキスト間に異同は見られなかった。
- 7) ラブランシュは「いかなる欲動に関しても、そのモデルを表すのはまさにセクシュアリティであって、恐らくセクシュアリティのみが用語本来の意味で欲動を表す」(VM:20/24) という主張の下、自己保存欲動を欲動ではなく本能の圏域に属するものとして扱っている。
- 8) このラブランシュの議論には、サドマゾヒズムから離れた死の欲動の問題が含まれていない。エロスによるリビドー的拘束 (その結果として死の欲動はサドマゾヒズムとして現象する) を承けないいわば「純粋な」死の欲動は、この図式のどこにも位置付けられない。『ザッヘル・マゾッホ紹介』などで提示されたジル・ドゥルーズによる分類を借りれば (Deleuze [1967:27-28/43-44])、経験的に観察される「死の欲動」に対する超越論的な (つまり死の欲動の現象を可能にするがそれ自体は経験の中に現れない) 「死の本能」として定義されるものの問題を、ラブランシュはパラドクスとして斥けてしまっている (VM:186/231)。後に『精神分析の新たな基盤たち』において明言されるように、ラブランシュは生の欲動と死の欲動の両方をあくまで「性欲動の二つの側面」(NF:144) と捉えており、彼にとってこの二つの欲動の対立は、自己保存の本能が失われ、セクシュアリティが生じる契機を俟って初めて成立するものに過ぎないのである (NF:138 の図参照)。
- 9) ただしこの図式によっては、(Ⅰ) 一次マゾヒズムと (Ⅲ) 二次マゾヒズムとの間の関係が明らかにはならない。ラブランシュは「欲動と欲動運命」における「(α) → (β) / (γ)」の行程をすべての場合に適用していると言えるが、前述の通り「マゾヒズムの経済論的問題」において採用されたのは「(Ⅰ-α) → (Ⅱ-β) → (Ⅲ-γ)」の行程であった。すなわちそこで (Ⅲ) 二次マゾヒズムは (Ⅰ) 一次マゾヒズムからではなくあく

まで(Ⅱ)サディズムから派生するものなのである。それにも拘らずラブランシュは(Ⅲ)を(Ⅰ)から派生するものとして扱っている。しかしその場合、二つのマゾヒズムの差異がどこにあるかが判然としなくなる。フロイトにとって一次マゾヒズムと二次マゾヒズムを区別するのは、後者がサディズムから派生する契機となる対象喪失の問題である。外界におけるサディズムの対象が喪失されるからこそ、サディズムがマゾヒズムに向き変る「ある種の情況」(GW13:377)が生じる。ここでのラブランシュの図式が閉却しているのは、有名な〈(喪失された)対象への同一化による自我変容〉という機制である。この機制は「喪とメランコリー」(1915年)においてメランコリー患者の過剰な自己非難を説明するために導入され(GW10:435)、後に『自我とエス』において自我一般の形成に関わるものとして敷衍された(GW13:256-257)。ラブランシュによる欲動の図式と対象喪失との関係をいかに考えるべきか。それは本稿に残された課題の一つである。

- 10) 例えば妙木[2017:184-184]には「私たちは大衆として全体主義や右翼的な傾向にすぐに自らをゆだねやすい、それはもともと私たちは寄る辺なき状態で生まれてきて、親に依存して、依託的な関係で幼児期を過ごすからである」という記述がみられるが、ここでの「依託的」という言葉は明らかに欲動同士の関係ではなく親子の関係に関して用いられており、厳密な使用とは言い難い。
- 11) 性的外傷説がフロイトの初期の性的病因論——それは精神分析の誕生そのものの条件ですらあった——において演じた重要な役割、およびその破棄によって可能となったフロイト理論の転回については、片岡[2020]を参照のこと。
- 12) 「早期誘惑」という用語は与えられていないものの、すでに『精神分析における生と死』でこうした〈母〉からの誘惑の問題が扱われており、フロイトが『続・精神分析入門講義』などの後期の著作において誘惑を「ほとんど普遍的な所与」(VM:57/68)と見做すようになったことが述べられていた。
- 13) フロイトが初めにこの問題に着手したのは1908年のテキスト「幼児の性理論について」(GW7:171-188)においてである。このテキストでは、当時まだ未刊行だったハンス少年の症例が語られており(GW7:176)、またここでの記述は後に『性理論三篇』に組み込まれた(GW5:95-97)。
- 14) フロイトの誘惑理論(「限定誘惑理論」)において「誘惑」という語が用いられているのは不適切に思える。幼児誘惑とは思春期以前における性的虐待ないし性的侵入の体験であり、それは「性的受動性の経験」(GW1:417)として考えられる。しかしここには「誘惑(Verführung/séduction)」という語に含まれている、誘う、掻き立てるといった要素が欠けている。実は別の箇所でも論じた通り(片岡[2020:667 n. 14])、フロイトが「誘惑」という語を使い始めるのは、「誘惑理論」の放棄以後に執筆された『性理論三篇』においてであり(GW5:91)、それ以前は「性的虐待」といった表現が用いられていた。すなわち「誘惑理論」という用語は、遡及的に使われ始めたのである。そして『性理論三篇』において導入された誘惑の概念とそれまでの性的外傷説との間には

大きな差異があり、『性理論三篇』において言われる誘惑は、早すぎる時期に幼児の中に潜在している性的満足を惹起してしまい、性的な発達段階に狂いを生じさせることとして論じられている。その意味においてはなるほど「誘惑」という語が使われていても不思議ではない。しかしながら精神分析研究においてこのような問題が俎上に上げられることはほぼなく、精神分析の伝統において、「誘惑」という言葉は子供に対する大人による性的侵入一般を指す専門用語として用いられている。だがそこではこの言葉が元来持っている意味内容が忘れ去られてしまう恐れがある。しかるにラプラランシュが原誘惑の語で示した〈謎〉のシニフィアンの伝達による誘惑は、子供をしてこの〈謎〉を解き明かすよう「誘惑」するものであるという点において、言葉本来のニュアンスを首尾よく復活させられていると言えるだろう。

引用文献

- フロイトからの引用はフィッシャー社版『フロイト全集』から行い、「GWa:b」(=『フロイト全集』a巻b頁)の略号で巻数と頁数を本文中に記した。
- ラプラランシュからの引用は本文中において略号で示した。それぞれの略号が指す著作は以下の通りである。VM= *Vie et mort en psychanalyse*, NF= *Nouveaux fondements pour la psychanalyse*
- 外国語文献からの引用文は、邦訳があるものはこれを参照したが、すべて拙訳を用いた。
- 特記のない限り引用文中の傍点は原文におけるイタリックないし隔字体を示す。

ジークムント・フロイトの著作

- Freud, S., *Gesammelte Werke*, Frankfurt am Main: Fischer Verlag (『フロイト全集』東京：岩波書店)
- « L'Hérédité et l'Étiologie des Névroses », in *Gesammelte Werke Band I*, S. 405–422. (立木康介訳「神経症の遺伝と病因」、『フロイト全集』第三巻、岩波書店、2010年、175–191頁)
- *Die Traumdeutung*, in *Gesammelte Werke Band II/III*. (新宮一成訳『夢解釈』、『フロイト全集』第四／五巻、2007/2011年)
- *Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*, in *Gesammelte Werke Band V*, S. 27–145. (渡邊俊之訳『性理論のための三篇』、『フロイト全集』第六巻、2009年、163–310頁)
- » *Über infantile Sexualtheorein* », in *Gesammelte Werke Band VII*, S. 171–188. (道旗泰三訳「幼児の性理論について」、『フロイト全集』第九巻、2007年、287–306頁)
- » *Die psychogene Sehstörung in psychoanalytischer Auffassung* », in *Gesammelte Werke Band VIII*, Fischer Verlag, S. 93–102. (高田珠樹訳「精神分析的観点から見た心因性視覚障害」『フロイト全集』第十一巻、2009年、223–232頁)

- » Zur Einführung des Narzißmus «, in *Gesammelte Werke Band X*, S. 137-170. (立木康介訳「ナルシズムの導入にむけて」『フロイト全集』第十三巻、2010年、115-151頁)
- » Triebe und Tribschicksale «, in *Gesammelte Werke Band X*, S. 210-232. (新宮一成訳「欲動と欲動運命」『フロイト全集』第十四巻、2010年、167-193頁)
- » Trauer und Melancholie «, in *Gesammelte Werke Band X*, S. 427-446. (新宮一成訳「喪とメランコリー」『フロイト全集』第十四巻、2010年、273-293頁)
- *Das Ich und das Es*, in *Gesammelte Werke Band XIII*, S. 235-289. (道簾泰三訳「自我とエス」、『フロイト全集』第十八巻、2007年、1-62頁)
- » Das ökonomische Problem des Masochismus «, in *Gesammelte Werke Band XIII*, S. 371-383. (本間直樹訳「マゾヒズムの経済論的問題」、『フロイト全集』第十八巻、2007年、287-300頁)
- *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*, in *Gesammelte Werke Band XV*. (道簾泰三訳『続・精神分析入門講義』、『フロイト全集』第二一卷、2011年、1-240頁所収)
- » Die endliche und die unendliche Analyse «, in *Gesammelte Werke Band XVI*, S. 57-99. (渡邊俊之訳「終わりのある分析と終わりのない分析」、『フロイト全集』第二一卷、2011年、241-294頁所収)

その他の著作

- Deleuze, G., *Présentation de Sacher-Masoch : Le froid et le cruel*, Paris : Éditions de Minuit, 1967. (堀千晶訳『ザッヘル=マゾッホ紹介——冷淡なものと残酷なもの』東京：河出書房新社（河出文庫）、2018年）
- Laplanche, J., *Vie et mort en psychanalyse* [2^e édition], Paris : Presses Universitaires de France, 2013. (十川幸司、堀川聡司、佐藤朋子訳『精神分析における生と死』東京：金剛出版、2018年)
- *Nouveaux fondements pour la psychanalyse : La séduction originaire* [3^e édition], Paris : Presses Universitaires de France, 2016.
- 片岡一竹「初期フロイトの性理論（1893-1900年）」、『早稲田大学文学研究科紀要』第65輯、2020年、655-670頁。
- 十川幸司『フロイディアン・ステップ——分析家の誕生』東京：みすず書房、2019年。
- 妙木浩之『寄る辺なき自我の時代——フロイト『精神分析入門講義』を読み直す』東京：現代書館、2017年。

(かたおか・いちたけ 早稲田大学文学研究科 博士後期課程／
日本学術振興会特別研究員)